

竜と竜神との関係

“竜”と“竜神”にまつわる伝説が、日本の全国いたるところに認められる。この両者の関連性については明らかなことは伝えられていない。こうした民間伝承を素材として民族文化を明らかにしようとしているのが伝説学であり民俗学といえる。

しかし、それを伝説といい、説話として、前代より、口から耳に伝えられているが、それがそのまま伝えられた通り、あるいは話題によっては尾ヒレがつけられ、ふるさとの心として後世へ、そして現代へと伝えられてきたのであろう。

そこで、これら伝えられている事柄が、その時代の文化過程としてそのまま扱われるとき、手だてを尽くしてその関連性を明らかにさせておく、そこに何らかの方法を求めなくてはならないと思う。それが明らかにされなければ、単なる迷信となり、あるいは盲信されると、思いもよらない低俗信仰が生まれるからである。そして、実際は、それがそのまま継承されて、現在に至っているものもある。

実は、その迷信が物質科学の上に立っているといえる現在の人文科学ではどうにも解明できないことである。したがって、単にそのままを現象として、そのまま見過してしまいうことも多いのである。その中には宗教として認められているものもある。

もう少し具体的にいうと、全国至る所に、これらを竜と竜神を対象とした、俗信仰集団をみるからである。ただ、「竜」とか、「竜王」とか、「竜神」という名称で、祭神として祀り、霊験あらたかな神様として信仰の対象としている。このようにただ伝統的に何の検討も加えず、ひどいものとなると、竜と竜神、それがへビ（蛇）といった長ものと共存させている。こうしたことは宗教・信仰界にとりいれられているものも多い。問題は、彼らにはこれらを「検討」する何の手だてもないことである。気の毒なのは、それをただ認めている信者たちである。すなわち、多くはこれらが何かの利益と結びついてあるとの期待から生じた誤解・曲解してのことである。

竜と竜神との神秘性と混同

一般の人たちは常識的理解として“竜神”をどのように捉えているのであろうか。これに関連して、架空的存在といわれている竜との関係は実のところは一体どうなのであろうか。

竜の存在は架空的であるとはいえ、さまざまな活躍をしている。たとえば、宗教芸術にこれほど貢献しているものも少なくないのではなからうか。造形としての彫刻、そして絵画……ことに日本画の、しかも宗教信仰絵画として、やはりそこには神秘的な竜神

との関連も含めて、信仰の対象となる人間以上の偉力・荘厳さというものが、その作者によって、力の差異はあるものとしても、普遍的なものを感じさせられる。

竜の伝説

竜は今から約1800～1900年前、中国の漢の時代の絵画にはじめて現れている。そして、その図様を見ると、斑紋のある馬そのままの形であって、現今見るような竜とは全く異なっているのである。

こういったことを一体どう考えたらよかろうか。察するに、前世紀の動物などから構想されたものではなかろうか。そして、わが国が往時隋・唐とさかんに交通していた結果、あるいは、それ以前に、朝鮮あたりからこの図様が輸入され、その「天を駆けるもの」という意味から「天斑馬」と呼ぶ事になったのではなかろうかと思われる。あるいは、わが国の伝説の方が旧いのか。その斑馬の思想が反対に中国に伝わることになったのかもしれない。とにかく、この点は考証家に一任したい。

とにかく、「天斑馬は竜には違いない」というのである。この説はかつて、私が浅野正恭先生から聞かされていた工学博士・故伊東忠太氏の説である。この伊東博士はわが国において「竜」に関する文献研究の権威で、今日「竜」に関する全ては、この説に基づいているということである。

なお、この竜については、わが国では「タツ」ともいう。このタツとは「火柱が立つ」という意味であり、これに関するすべてを主宰するのが竜神である、と付言されていたことを記憶している。

大槻文博編「言海」(第2版)によれば、

「竜(名詞) <リョウ・リュウ> 起(た)つの義か。

想像の動物の名。鱗虫の長という。画くところ、身は大蛇のごとく、背に $9 \times 9 = 81$ 鱗あり。四足各々五指あり。耳あり。二角あり。長き鬚あり。面甚だ長く、最もあしき相を表す。能く雲を興し、雨を致し、水を潜み、天に昇り、神力測るべからず、

とある。

以上のようなものが多角的広範に、一般人の「竜」に対する懸念であろうか。が、この竜については宗教人というより、むしろ信仰人の間で神とあがめられ、竜神、あるいは竜王となり、彼らの信仰の対象となっているのであり、それらを総合したものがいろいろな伝説を生んだのであろう。

それでは、以上のことが一体どうして、そのような結果に至ったのか、その意味や経路を解明してくれるものは一体何であろうか。それは宗教にはあらず、心霊科学（註。形而上学の主張の真実を理解するために科学的解明手法を採用した学問）の上に立ってこそ、はじめて、そのよって来るところを理解することができるのである。結局は、現状の唯物主義至上の狭い視野の科学は依らない学術による解明以外には方法はなかろう。

さて、われわれ心霊学徒は心霊科学に基づいて自然霊を分類しながら、「自然霊」の研究を進めているが、その分類の一つにこの「竜神」がある。

竜神の心霊科学的解明

まず、この自然霊の一分類である「竜神」と、一般の人たちの抱いている「竜」についての概念とが、どうも混乱を来して、遂には信仰の対象である神さまにまで祭り上げられてしまい、元の形が変化してしまったと思われる。

もっとも、これについては、伝説学とか民俗学などは、文化人類学の立場で解明していることと思うが、とりわけ、信仰の対象になっている点については、それと関連ある宗教・教派が教学におりこみ、自家独特の縁起・教説をたて、信者たちに納得させていることである。

しかし、こうしたことについても、学術としての心霊科学の上に立った解明こそ、最も正統的な手続きによってその真を明らかにしたものである。

浅野正恭先生が、一応「古事記生命観」の内容に、仮説を立てておられる。その説に、まず耳を傾けることにしよう。

ウエルズの名著「生命の科学」に……

「アッシェル大僧正は今から 300 年前において、世界創造の時を西暦紀元前 4004 年と定めた。そして、その正確な日付と時間までも示した彼の計算は、今日なお認定聖書の余白に堂々と掲載されている。しかし彼の計算は随分間違いであった。地球の年齢はどれだけであるか。」

これに対して地質学的年代（図表が載せられている）、この図によれば新生代（人類発生時代）に入るのに先立ち、蛇頸竜類、疾走性恐竜類（人類発生時代）その他の雷竜、載城竜、梁竜、恐竜類等々、いわゆる竜属なるものが、ほとんど絶滅に帰したことを示している。

「もっとも竜属といったからといって、私たちの意味する竜であることを、今直ちに意味するという訳ではない。ここに竜というのは、その体躯の偉大なることを示すもの

と考えるべきである。それがいわゆる竜属なるものである。

これらの種は遂に絶滅したのであるが、考古学的調査では約 5000 万年前に起こった地球の大変革のためであるという。もっとも、この大変革に止まらず、前後併せて 7 回もあった。そのいずれの場合も生物に対して甚だ大きな脅威であった。」

という要旨を基礎的前提として……

「心霊学の基本的原則の一つとして霊魂不滅という鉄則がある。肉体が滅亡しても霊魂は不滅に存する。そしてその霊魂は同一種族の守護霊として働くものであることは、私たちの常に経験するところである。しかし、それも同一種族が生存すればのことで、全く絶滅に帰した上記竜属の霊魂に至っては、そんな事のできようはずがないと考えられるべきものである。たとえそれが 5000 万年もの以前のことであったとはいえ、その 5000 万年は一時に経過したのではなく、つぎからつぎへと経過した年数であるから、彼ら種族の肉体的破壊が起こった後、霊魂として如何なる態度に出たかということは、無論想像の域を脱しないものではあるが、一応考えられるべき問題である。

彼ら竜属が絶滅の悲運に遭遇した原因は、前に申したように、地球の変革が起こったためである。そこで、霊魂としてどこに怨みのお尻を持って行くところもない。そして彼ら偉大な体躯をもっていたところの霊魂の関心が、地球上のあらゆる異変時に繋がることとなるのは、是非もないことだろうと推察され得る訳である。そして地球上にはその後、大なり小なりの異変がひっきりなしに起こっているから、それが 5000 万年も前であったとはいえ、それ等霊魂はお尻を持って行くことのない怨みを、大なり小なりの異変にかけつつ、今日に及んでいるものと考えられ得るのである。地球の大なり小なりの異変の中には、地震爆発は申すに及ばず、暴風雨などもその一つとして数えられるべきである。そこでこれらの異変があると、彼ら霊魂はそれとばかり、興に乗じて来ることになるのであろう。そして、これがために惨害は一層劇しいものとなるであろう。近い例としては関東大震災があのような惨害を演じたのは、彼らのお手伝いがあったのではなかったか。当時誰いうともなく天譴神罰ということが言い出されたのは暗にそのような感じが人々の脳裏にひらめいたからではなかったか。

私はもう少し以上の考察を進めてみたい。それは地球が漸次変革の程度が低下して行ったということである。すなわち比較的平穏になりつつあって、変革現象が頻繁には起こらなくなった。爆発地震や大暴風などはあっても、これは昔時の地形山岳の変革などに比すべきもないのである。だから彼らの霊魂としてはおそらく手持ち無沙汰を感じざ

るをえなくなったことであろう。そして天然現象……風雨雷霆等の……も地球の所為であるところから、彼ら靈魂たちがようやくこの普通の天然現象にも興味をもつこととなったであろうと考えられる。そこで天然現象は竜神の受け持ちだと言われているその竜神は、この絶滅竜属の靈魂たちを指すのであろうという推理に導きうることになる。そこで、天然現象にのみ関心を持つとしか思われないこれら竜神（竜属の靈魂）が、人間などに興味をもってこれと交渉するようなことはあるはずもない。

しかしながら、竜神といっても、それがこれらの竜属靈魂のみであるとは限らない。私が常に主張するとおり、神には伊邪那美系と伊邪那岐系とがある。伊邪那美系の神は靈魂の神、伊邪那岐系の神は靈魂にあらざる神で、天然現象に興味を持つ靈魂を伊邪那美系の神として、この他にそうでない伊邪那岐系の神、これも竜神と申し上げれば申し上げることができる神様であることも、ほとんど確定的存在であることだけを申し添えておく。しかしながら、伊邪那岐系神様のことに至っては、靈魂の神の研究などよりは一層困難で、到底今の私たちの研究程度で、とかくの議論を樹て得るまでにはなっていない。私もこれに対する私見を持っていないではないが。」（浅野正恭述「竜神、天狗の一考察」の一節）

なお、この説については、もっと詳述されているものが、同氏著「古事記生命観」である。

靈界通信による竜神の本質

何と言おうとも、五官で感得できない、しかも隠微な靈魂のことであり、また靈界の組織も単一なものではないとしても、目下靈界生活をつづけているかつての地上人に、その詳細を訊くことも必要と思う。とりわけ竜神に関しては、わが国独特の存在とは言わないが、ことにわが国伝統の上に、特殊な存在である竜神であるので、一応、この問題に関する「靈界通信」によって、その本質を知り、認識を高めることも、日本人として必要なことの一つであろう。

その意味で、わが国における靈界通信の白眉『小桜姫物語』（これは8カ年にわたる科学的調査研究に基づいてまとめられた通信である。わが国にも靈界通信の2、3はあるが、それには科学的検証がされず、ただ受信されたそのままを公表したものであり、信頼性の乏しい点が指摘される。）が参考となる。

この靈界通信によれば、竜神の本質の理解が容易となるが、また、一方で、一般の人たちが誤解しているものとして、竜宮界と竜神との関係（俗説というか、伝説による「浦

島物語」など) と異なる様子が、同書「竜神の修業場 (173 頁) 以下において、竜神の眞の生活が叙述されている。

このように竜神に関する解説を一般人向けとして書かれたものは誠に少ない。それであるからといって、わが日本特有の靈的なものとして思考することは早計で、それは海外の文献にも、これを見ることが出来るからである。いくつかの靈界通信には、靈界人によりこの靈魂 (竜神) を詳細に描写した通信も存在するからである。

たとえば、パワー霊からの通信、あるいは、幽界に直接幽体脱離をして死後の世界に向かい、彼の叔父さんと共に幽界の物語を著したワード教授。すなわち、それらの幽界・靈界における見聞記録を内容とした浅野和二郎先生の邦訳著「死後の世界」「幽界行脚」によって知ることができよう。

とりわけ竜神界の存在による竜神に関しての研究は、海外においてはセオゾフィー (神智学) の研究にはじまるということができる。そして、遂に故コナン・ドイルの「妖精来」の刊行とともに他界には人霊以外に、全然別個の存在として自然霊の発見とその研究が行われてきた。しかし、依然として、わが国の古神道所伝の神々 (最高級の竜神) とは距離が遠かったが、その後図らずもジョフレイ・ホドソンの名著「天使来」の出版に及んで、太陽神界の組織、国家の守護神について、つつこんだ心靈的研究が発表された。ここに至って、やっとキリスト教国においても正しい認識を持つ人々が増え、ことに欧米の心靈学会にも仲間ができたわけである。

このホドソンは、自身が第六感的靈能の所有者で、なかなかの鋭い靈視能力者のようである。したがって「天使来」にも自然霊の生活を叙述しているが、わが国の神々、また竜神と同意義のもの の性質・種類・形態等についてなかなか詳しく叙述されている。

[編集部] 以下の引用は協長生先生の体験報告です。(「心靈と人生」47 卷 1 号、1974 年)

私が靈視体験した竜神

1

中世の遁世人の結ぶ庵にも似た、ただ疲軀を容るるにたる陋屋である。ただ一つの取り柄ともいえようか。庭前と渚に近い松林の樹間から、太平洋の一角にあたる鹿島灘の白い波浪が、また夕陽には多彩な波しぶきを一眺のうちに瞰下される景觀であろう。

かれこれ二昔ともなったか、十幾年前の元旦。東天紅による初日影が和やかである。それが障子に映え、えも言えぬ晨であった。

不思議なことに、私の心に神秘的な動きが感じられ、ご来光を拝もうという心持ちで障子を披いた。樹間から眩い五彩といえる陽光である。端座した。不識、心から静かに天津祝詞を奏上させられた雰囲気である。

祝辞の半ば頃か。無心ともいえよう。その間、その一瞬。金銀五色の雲が次第に流れたなびくのである。しかも、その彩雲にそうて燐光から五彩の光が放射されたといえる竜体を靈視したのである。彩雲とはこの五光による色彩かも知れない。この彩雲と光り輝く竜体との偉観。この光景はしばしば靈視した竜体ではない。私にとって初めての体験である。さまざまな感想が浮かんだこと、言うまでもない。

世上、金竜という言葉がある。そういう言葉ではあまりに貧弱な表現である。

かつて、エバンスが靈視した自然霊とその霊体……もちろん竜体であるのに近似している。

2

これも昔語りとなった、もう 30 幾年も前の物語である。北海道の会員での招請で、道の各地を巡講したことがある。当時、本誌上でも報告したと記憶している。実は第一日目、目的地苫小牧へ向かう途中の青函連絡船が台風のため出港が遅れ、遂には出発したものの幾マイル前進したことか。突如、強風。以前にも増して航行不可能となって立ち往生。

もしも、この船が定時に函館に入港が不可能となれば、会場の聴講者にトンだ迷惑をかける事になる。

「アア！困ったことだ」

とはいえ、この自然現象にはどうにもならない。船客の人々にも予定があろう。“航行をつづける！”との騒ぎが大きい。

焦りと、焦燥感にイライラといったものが、識らず、ジッとしていることすら邪魔をする。だが、勇気をもって気を鎮め、横臥して瞑目する。その一瞬間船内狭ましと竜体が渦を巻いている。その動作や靈的雰囲気から感じたままを靈視させられたのである。けれども竜眼の炯々とした、その眼光は鋭く、私を睨み、何かを悟らせていることが感じられた。

つぎの瞬間、またも驚かされたではないか。船はゴトンゴトンと進航をはじめたのである。

この竜神の竜体は、白色に近い、やはり彩光のある眼光とは反対に美しい竜体であった。

この竜体は、いつも霊視させてもらえる竜神である。ある時は精神統一会場において、ある時は、会員の質疑に答えるときに。

3

ここで、私は私の霊視した竜体の色彩を披露しようとしているのではない。

一般の人たちは竜神であれば同一視して、すべて神様としてみなしているようである。ここに誤りがあることを正しておきたいので、こんな貧弱が体験を持ち出したのである。

実は、竜神ではあっても、他界の各層にそれぞれ居住しているわけである。例えば、幽界にも竜神を視る。しかし、そこに竜神というより、自然霊としての上下が存在するのである。

われわれが第一義、第二義と呼んでいる神様は、これこそ高級の竜神であって、もちろん神界に居住されている。これに対して第四義の神と呼んでいるところの「隠り身」である。これを一般では神様としているが、幽界に居住している低級の竜神である。

前述した、北海道に巡講した際に、苫小牧の会員がその付近の海岸に「八大竜王」として祀られている祠があることを教えてくれた。霊験アラタカであるというが、それとは反対に、迷信的な存在と思われる漁民の話もある、そこで、ちょうど苫小牧付近の景色を眺める目的で出かける予定があったので、その散歩のついでに会員に伴われてこの祠を尋ねたことがあった。

なるほど、白い大きな表柱に、墨黒々と「〇〇八大竜王」と書かれていた。しかし、名前は大了たものであったが、幽界の居住者の一竜神が祀られており、この低級霊が拝む人に働いていることが判って、会員の方々に「竜神談」と題していろいろと講釈したことである。